

てんかん医療と性

弘前大学医学部
神経精神医学教室

福島 裕

はじめに—歴史的なこと—

性とてんかんの関係については、古い時代から、関心がもたれてきたようです。てんかんという不思議な病と生殖という神秘的な出来事とを素朴に関係づけた昔の人達の考え方は十分想像できます。一方、てんかん発作と性交の現象としての類似性を推定する考えもありました。

性とてんかんの関係は、18世紀に入ってからでも、医学的に信じられていました。もともと、それは、時代の思潮や道徳感を反映した、いわば医学的迷信とでもいえるべきものでした。たとえば、「過度の性交がてんかんを起す」とか、逆に、「極端な禁欲はてんかんの原因になる」といった説です。一方では、「マスターベーションがてんかんの原因である」とする説も広く信じられたようで、この説によって、去勢とか陰核切除術といった「てんかんの治療術」が実際に行われ、その効果が論議されたともいいます。このような「学説」に何の科学的裏付けもな

いことは、間もなく、明らかにされるのですが、このような過去の歴史は、私たちに、誤った考えを信じこむことが、——性の問題においても——いかに恐ろしい結果を招くことか、改めて教えてくれます。

ところで、性の問題は極めて個人的な事柄であり、しかも、みだりにこれを口にするのはタブーとされてきました。このようなこともあって、人間の性や性行動について、それを科学的に説明することは、ずいぶん遅れました。今日でもそれが十分に解明されたとはいえませんが、一方、性科学の知識が一般の啓蒙に役立つているとは云い難い面があります。ここでは、そのような現状を考えながら話を進めたいと思います。

性の発達

てんかんと性の問題に入る前に、人間の性について考えてみる必要があります。それは、てんかんの患者さんも患者である以前に人間であり、その人間の現象の一つとして性があるからで

す。ですから、てんかんの患者さんが性の悩みをもったときに、まず、それが「てんかん」ということをぬきにして、人間としての性の問題ではないかということを考えてみる必要があります。実際、このような悩みをもって相談にみえる患者さんのなかには、てんかん（あるいは抗てんかん薬治療）と性の異常感とを短絡的に結びつけている人があります。たとえば、思春期の第二次性徴としての生殖器の変化を病的な現象ではないかと心配して来た例がありますし、また、夢精を「新らたな」

てんかん発作の症状と考えて相談にみえた患者さん母子もありました。このように、てんかんの患者さんのなかにも、健康な性とその発達を「てんかん（あるいは抗てんかん薬）」によるものと誤解していることがあります。まず、基本において、性教育ということが必要となるわけです。

しかし、そのような訴えをもってくる患者さんのなかに、本当に性の異常がある例がないわけではありません。ただ、その場合も、それが直接てんかん（あるいは抗てんかん薬）と関係あるものかどうかが問題です。

大学を卒業して、ある会社に入った男子患者の例を挙げてみましょう。彼は、入社後、同僚の女性とどうやって

付合ったらよいかわからない。だから、セックスや女性の生理現象について知りたい。自分には、男として欠陥があるのではないか。そして、それはてんかんによるものではないか、等々、沢山の性についての悩みをもってやって来たのです。

実は、彼は小さい時に発病し、しかも病弱であったこともあって、極めて偏った生活をしてきました。一言でいえば、母親べったり、大学を卒業するまで母親と一緒に入浴するといったありさまで、ほとんど友達付き合いもありませんでした。ここまで書くと、彼の性の悩みが何に由来するのか、おおよそ見当がつくと思います。彼は健全な男性としての心の発達をしそこなっていたのです。ボーボワールは彼女の著書「第二の性」の冒頭で、「人は女に生まれません。女になるのだ」と書いています。これは肉体的な性と心の性のそれぞれの発達は違うのだということ述べているのですが、いま挙げた青年の例では、肉体的な性は大人になつたものの、心理的な男性性の発達がそこなわれていたため、実際の性的な場面に直面して、性の問題に悩むことになったわけですね。

人格の発達の歪みが性心理の異常を生むことはよく知られているところだ

すが、この例は、間接的にはてんかんであることも関係して、心理的な性の発達が障害され、性の問題をもつようになったといえるでしょう。

てんかんと性

1. 発作

性的な興奮や性行為が発作の誘因となる例や発作症状としての性的な行動を示すてんかんの症例についての報告があります。しかし、これらはいずれも稀な症例として報告されているのであって、決して一般的にみられる現象ではありません。患者さんのなかには、性交の最中に発作がおこったり、オーガズムが発作を誘発するのではないかという不安をもっている方が意外に多いと聞いておりますが、無用な心配と思われまふ。そのような例が無いわけではありませんが、それは極く一部のめずらしい例であるということです。一方、てんかん発作の性質から考えて、これまでそのような発作のなかった人が、その後、このような発作をもつようになることも考え難いところではあります。

2. 性障害

私が相談を受けた性的問題のうち、最も多いものが男子患者でのインポテンツです。しかも、それは側頭葉てんかんで発作が抑制されていない例ばか

りです。もちろん、側頭葉てんかんで発作がある人でも、結婚して子供をもうけている人は沢山あるのですが、相談例全体から発作型との関係をみますと、側頭葉てんかんに多いのではないかと印象を受けます。

側頭葉辺縁系の機能と性行動との間に深い関係があることが知られております。そして、てんかん患者の性行動を研究したいくつかの報告は、側頭葉てんかんで性的関心・性欲の減退やインポテンツが多いことを述べています。一方、ある研究は、発作が抑制されることが重要であり、早い時期に発作が抑制された側頭葉てんかんで性的関心はほとんど障害されていないという結果を示しています。

ただ、性的関心・性欲・性的能力とこのこととの客観的評価は大変むずかしい問題ですし、側頭葉てんかんと関係のある別な因子（たとえば抗てんかん薬）についての検討を行った上でないとはつきりした結論は出せないように思います。

3. 抗てんかん薬

抗てんかん薬が男性の性的機能に影響を与える可能性は否定できません。抗てんかん薬の多くには、鎮静作用がありますので、大量に投与された場合、性的機能を抑制することが想像される

からです。実際、これまでに、フェノバルビタール、プリミドン、スルチアムに性欲減退や男性の性的機能障害（インポテンツ）の副作用がみられたという報告があります。

一方、抗てんかん薬による性ホルモン抑制の報告があります。ただ、てんかん患者での抗てんかん薬治療と性ホルモンとの抑制との関係、性ホルモンの抑制と性的機能の障害との関係について、その因果関係がはっきり証明されてはいない現状です。

4. 心理的問題

てんかん患者にみられた性欲減退や性的機能の障害については、側頭葉機能の障害とか抗てんかん薬の副作用の他にも考えなければならぬ重要な問題があります。それは、てんかんであるということによる劣等感や自信のなさ、さらに、遺伝についての不安、性交がてんかんを誘発するのでないかという恐れです。つまり、ここで心理的要因としてまとめられる問題です。一般に、心理的な面が性行動に大変大きな影響をもつことはよく知られているところではあります。てんかん患者の訴える性障害には、多かれ少なかれ、このような心理的要因が関与しているのではないかと思われまふ。

5. 生殖能力

抗てんかん薬が精子生成を障害することを示唆する報告があります。しかし、治療中の男子てんかん患者の妻における妊娠と出産は、一般人口における期待値とくらべ、有意差がないことが示されており、少くとも、結婚している男子患者の生殖能力には、とりたてて問題はないものと思われまふ。

一方、女子患者については、多剤併用例、多量の抗てんかん薬服用例で、流産・死産の発生が多いことが報告されておりまふ。しかし、受精能力そのものについての成績は不明です。女子患者での産児率は男子患者の妻の産児率とくらべても、また、一般人口での期待値にくらべても低いという報告があります。それは、遺伝や抗てんかん薬の催奇性への恐れといった心理的要因が大きく作用しているものと推定されまふ。

おわりに

てんかんと性との問題については、まだ、十分に明らかにされていない点が多いようではあります。しかし、この問題を考える前に、まず、性の問題を正しく理解することが必要であると考へます。その上で、てんかんと性との問題を考へるべきでしょう。軽率な関係づけや誤解は不幸な結果を招くことになりまふ。